

➤ 18日 木曜

Ⅱ サムエル



19:9 イスラエルの全部族の間で、民はみなこう言って争っていた。「王が敵の手から、われわれを救い出してください。われわれをペリシテ人の手から助け出してくださいしたのは王だ。ところが今、王はアブサロムのいるところから国外に逃げられる。」

19:10 われわれが油を注いで王としたアブサロムは、戦いで死んでしまった。あなたがたは今、王を連れ戻すために、なぜ何もしないでいるのか。」

19:11 ダビデ王は、祭司ツァドクとエブヤタルに人を遣わして言った。「ユダの長老たちにごう告げなさい。『全イスラエルの言っていることが、ここの家にいる王の耳に届いたのに、あなたがたは、なぜ王をその王宮に連れ戻すことをいつまでもためらっているのか。』」

19:12 あなたがたは、私の兄弟、私の骨肉だ。なぜ王を連れ戻すのをいつまでもためらっているのか。』

19:13 アマサにも言わなければならない。『あなたは私の骨肉ではないか。もしあなたが、ヨアブに代わってこれからいつまでも、私の軍の長にならないなら、神がこの私を幾重にも罰せられるように。』」

19:14 すべてのユダの人々は、あたかも一人の人のように心を動かされた。彼らは王のもとに人を遣わして、「あなたも家来たちもみな、お帰りください」と言った。

19:15 王は帰途につき、ヨルダン川までやって来た。一方、ユダの人々は、王を迎えてヨルダン川を渡らせるためにギルガルに来た。

ダビデは神の民があるべき姿を取り戻すためには、心の一致が必要であると知っていました。彼は今や

イスラエルとユダでは大きな武力を取り戻したのですが、それで人々を押しえつけようとはしませんでした。彼らの心がダビデを王と認めることによって、「あたかも一人の人の人の心のように」ならせたのです。

ダビデの行いは多分に政治的な匂いがしますが、彼は自分にできることをしたのです。このように良い目的のためには、知恵を用いることも必要ですが、あくまでも主のみこころに叶うことが第一です。

ところで、ダビデは敵であったマアサにも寛大な心を示します。(実はその動機は、ダビデの思いがヨアブから離れたゆえに、その反動としてマアサを用いたかったのだと言えます。それまで用いていたヨアブは息子アブサロムを殺したからです。)多くの註解者はダビデの心には、信仰的な動機よりも、王位を守ろうとする保身や、アブサロムへの思いを優先する私情があったことを指摘します。

ダビデを単に模範として見るなら、表面的な見方しか生まれません。全ての聖徒がそうであるように、ダビデもまた不完全な人間であることに気づきつつ、そこに主の導きと警告があることを悟る必要があります。

私たちは、自分の言動の中に、保身や私情が潜み、それが純粋な信仰を妨げていないかどうかを吟味する必要があります。その上で、ダビデの良さである寛容に倣い、積極的な信仰で前進しましょう。

①神のみこころは？(信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど)

②どんな思いになりましたか？(感情や願いなど)

③生き方にどう適用しますか？(あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか)

④この世にあって何を実践しますか？

